

成城民俗学の系譜〈卒業生編〉

鈴木通大

はじめに

成城民俗学の系譜（卒業生編）を語るにあたって、最初に「大学院」のことを簡潔に述べておきたい。私が日本常民文化専攻修士課程）に入学したのは、一九七二年であったが、その日本常民文化専攻修士課程は一九六九（昭和四十四）年に開設され、一九七一年に博士課程が認可された。日本常民文化専攻は、当時の文化史コース（現・文化史学科）を中心に、芸術学コース（現・芸術学科）、マスコミユニケーションコース（現・マスコミユニケーション学科）の三本足で出発している¹。当時は、民俗学、考古学、歴史学、芸術学、マスコミユニケーション等を学ぶ学生たちが同床異夢の状態であったが、活気に満ちた環境を形成していたと実感している。大学院の改編によって、一九八三（昭和五十八）年に、修士課程は博士課程前期、博士課程は博士課程後期となり、この時期を境として日本常民文化専攻のあり方もいい意味で変化したと思われる。

ここでは、民俗学を専門に研究し、プロパーをめざした当時の院生、すなわち大学院に学籍を置いていた者の研究動向を中心にした「成城民俗学の系譜」を概観する。そこで、可能な限り多くの卒業生を対象にその研究成果を紹介するように努めたが、その対象者が枚挙にいとまがないほど多かったので、今回は十分に紹介できなかった点をお断りしておきたい。

1. 大学院の草創期における日本常民文化研究室について

最初に、私が在籍した一九七〇年代ころの日本常民文化研究室の様子について語ってみたい。どんな科目の講義があったのか、一九七一（昭和四十六）年、修士課程に入学した鈴木が提出した「受講届」で見えてみよう。月

曜日三時限目に「日本民間信仰史演習」(堀一郎)、木曜日三時限目に「東洋文化史演習」(田中克己)、金曜日二時限目に「宗教民俗特殊講義」(古野清人)、三時限目に「日本民俗学特講」(大藤時彦)、四時限目に「日本文化史特講」(新城常三)となっている。

また、講義内容とスタッフは「昭和四十八年度講義要項」によると、「日本常民文化論」(講師 大藤時彦)「日本の口承文芸を論じて諸外国との比較研究に及ぶ」・「日本民俗学演習」(講師 大藤時彦)「日本の祭を講説して民間信仰の問題を究明する」・「宗教民俗学特殊講義」(講師 古野清人)「記載なし」・「日本民間信仰史」(教授 堀一郎)「民俗学と宗教学の接点において、「聖と俗」の問題をとりあげ、研究討論する」・「日本常民文化史特殊講義」(教授 新城常三)「狂言その他中世史料を用いて、常民の文化・思想・生活等の跡を探る」・「先史文化論」(講師 佐藤達夫)「先史考古学の方法論、ならびにヨーロッパ先史考古学一般について学習するために、極めて適当と考えられるので、下記の文献の講義を行う」・「東洋文化史演習」(教授 田中克己)「中国民俗学は日本民俗学よりおこなわれているようであるが、テキストその他により中国民俗との比較をすすめていく」・「日本思想史特殊講義」(講師 神島二郎)「現代日本の精神構造を歴史に遡りながら概説する」などである。²⁾

大学院の研究室は、図書館裏の建物(四号館)四階にあり、講義がないときはここで自習したり、談話したりしていた。当初は開室時間が決まっていたが、その後、自主管理となり、次第に図書も少しずつ充実して、研究体制が整ってきた。しかも、日本常民文化専攻の学生は、前述したように民俗学以外の履修者も在籍していた。そこで、「常民文化」が共有の理念となるためにほぼ全員が参加して「理論合宿」と銘打った合同研究会を成城学園の厚生施設である白樺荘や富望荘などで開催していた。この研究会には、前述したように民俗学をはじめ、社会学(マスコミュニケーション学)、歴史学、考古学、美術史学などを専攻する者たちが専門的領域を超えて参加し、その光景はあたかも学際的研究の先駆けのようであった。

いっぽうで民俗学を専攻する者が増えるに連れて、ようやく民俗学に特化した研究会を開けるようになってき

た。当時は、最初、民俗学の目的と方法など、理論的なテーマに関心が注がれていたが、しだいに先行論文を対象に内容分析を通して提示されている仮説の検証をめざすグループ、沖縄を拠点にした南島研究をめざすグループなどに、発展的に分派し、相互に切磋琢磨していった。こうした動向が底流となって、研究成果が発表できる共通の場となる研究誌『常民文化』³の発刊へとつながっていった。

また、プリンストン大学から来日していたロナルド・モース Ronald A. Morse (一九三八-) と韓国から来日していた崔吉城の両氏から多くの有益な学識を学ぶと同時に、知的な刺激を受ける機会を得た。とくに、柳田國男研究で柳田文庫に訪れていたモース氏からは柳田の民俗学研究法などをはじめ、貴重な学恩を多く受けた。

モース氏によると、柳田の学問には理論的な問題を厳密に扱うことが欠けていること、そのために民俗学の学問的立場をかなり弱くしていること⁴、さらに民俗学の若手研究者が民俗学の理論に本気で取り組むようになったのはごく最近のことであるという指摘を受けた。さらに、その著書『近代化への挑戦——柳田國男の遺産——』⁵のなかでは、日本民俗学の将来に一条の光として、成城大学には民俗学を「科学的な学問」とすべく努力している数人の若手研究者がいて、「彼らが日本の成果を諸外国に紹介できる資金的な援助を求めている」と言及し、さらにこうした動きについて堀一郎教授は亡くなる直前までめんどうをみておられたので彼の死は大変惜しまれる⁶と、当時の様子を紹介している。

そのモース氏から、一九七五(昭和五十)年七月に東京九段のホテルグランドパレスで「柳田國男生誕百年記念国際シンポジウム」が開催された際、懇親会の席上でアメリカ民俗学界の第一人者であったリチャード・M・ドーンソン氏に紹介されたことは熱き想い出となっている。

その後、大学院を去ってから、後輩やかつての仲間とともに通称「ムラ研」といわれた「ムラ研究会」に参加する機会を得た。この研究会は、成城大学の卒業生や当時の大学院生を中心に結成された民俗学の研究を志向する者の集まりであり、和気藹々のなかにも適度の緊張感があり、相互に向上心をもたらず場でもあったといえる⁷。

2. 研究活動の軌跡 I——修士課程・博士課程の時代（一九六九～一九八二）

成城大学では、学部の文化史学科と大学院の日本常民文化専攻課程において、「民俗学」を学び、研究できることは人口に膾炙している。しかも、日本民俗学の創始者柳田國男の関与が多大であったことから、巷間では「柳田民俗学」を受け継いでいるように考えられている。このことは、「柳田民俗学」≡「成城民俗学」と理解されていることを指している。「常民文化」とともに「成城民俗学」の概念について追求する姿勢が在ったにもかかわらず、本格的には取組まなかったが、潜在的に意識していたように思われる。もし、成城で民俗学（研究）を学んだ者にとって「成城民俗学」が存在するならば、共有できる理念が反映されていることが条件である。すなわち、他者の大学とは差別化できるような民俗学の目的や方法が根底に存在するならば、この理念が一貫として継続されることである、と考える。では、この時期の日本常民文化専攻民俗学専修の卒業生について、その研究テーマや成果などを、五十音順で紹介する。

岩崎真幸（元東北学院大学）には、「モリ信仰におけるハヤマ的性格について——山形県鶴岡市清水における『モリ供養』の事例報告——」（『常民文化』創刊号、一九七七）などの研究成果があり、東北地方のハヤマ信仰などの民間信仰を中心に調査研究している。そのほかに、「東沢目の信仰生活とオボツナをめぐる協力関係——岩手県江刺市梁川町東沢目の民俗——」（『東北学院大学東北文化研究所紀要』二二、一九八二）などがある。

恵津森智行（世田谷区立郷土資料館）には、「九十九里浜聞書——千葉県山武郡九十九里町——」（『常民文化』二、一九七八）などがあり、博物館において民俗研究に従事している。

大本憲夫（元山村学園短期大学、一九四七—二〇一六）は、鬼籍に入ってしまったが、「若者組の加入形態と村落

構成」(『城』一、一九七四)において若者組への加入形態の類型化を試み、加入形態と村落の三要素、規模・産業形態、価格、階層性との関係について、全国三六七村落の事例をもとに検証している。「宮古島村落における社会組織と祭祀組織——平良市松原の事例——」(『常民文化』創刊号、一九七七)などの研究成果がある。

とくに、「沖繩宮古群島の祭祀体系」(『民俗学研究所紀要』六、一九八二)では、第二回日本民俗学会研究奨励賞を受賞し、成城大学出身者の受賞第一号となっている。また、中込陸子と「村制・族制」(『日本民俗学』一六〇〈特集 日本民俗学の研究動向(昭和五八・五九年)〉、一九八五)を執筆している。

年齢階梯制の研究から、宮古島をフィールドの拠点とした沖繩研究に取組んだが、この大本に続いて、小島清志、藤井せい子、高橋泉らが宮古島で民俗調査を実施していることを指摘しておきたい。

喜山朝彦(宇都宮文星短期大学)には、「位牌祭祀についての予備的報告——東京都八王子市別所の事例——」(『常民文化』五、一九八二)、「奄美与論島の沖繩的ユタと依頼者についての一考察——とくに觀光化との関連で——」(『常民文化』九、一九八六)などがあり、沖繩・奄美をフィールドにした研究成果を発表している。

小林稔(文化庁)は、「奥三河のシカウチ神事」(『民俗』一一七、一九八四)など、愛知県や長野県にみられるシカウチ神事などを調査研究し、観光文化研究所、千葉県博物館を経て、現在は民俗文化財の指定や文化遺産保護のあり方について取組んでいる。

小嶋博巳(ノートルダム清心女子大学)は、「俗信」覚書——概念の再検討に向けて——」(『民俗学評論』二三、一九八三)で第四回日本民俗学会研究奨励賞を受賞している。その他に、「常総地方の大師まわり——成田組十善講事例報告——」(『常民文化』二、一九七八)、「利根川下流域の新四国巡礼——いわゆる地方巡礼の理解に向けて——」(『成城文藝』一一三・一一四、一九八五)など、主に巡礼研究で成果をあげている。

小松清は葬墓制などの調査研究に、「柳田国男の『葬制の沿革について』をめぐって」(『常民文化』二、一九七八)、「石手県下の墓制——一戸町中里の事例について——」(『常民文化』三、一九八〇)などの成果がある。

鈴木通大（元神奈川県立歴史博物館）には、「最後の稲束」儀礼について（『日本民俗学』一〇九、一九七七）、「神社合祀後における〈分祀〉について——神奈川県下の民俗事例をもとに——」（『神奈川県立博物館研究報告』一〇、一九八二）、「神社があるムラと神社がないムラ——神社合祀後における神社復祀の実態について」（松崎憲三編『近代庶民生活の展開』三一書房、一九九八）、「特論博物館と民俗学——博物館における民俗学の可能性——」（『日本民俗学』二二七、二〇〇二）などの研究成果があり、明治期の神社整理で合祀されたムラの神社が元の場所に返る〈分祀〉（復祀）という民俗事象に注目して神奈川県下の事例をもとにその要因の類型化を試みている。現在は、神奈川県下の民俗、とくに地元の大和市域をフィールドにして民俗事象の経年調査を続け、いつばうで農耕儀礼における穀霊信仰の研究に取組んでいる。

高橋泉（仙台白百合女子大学）には、柳田国男が主宰し実施した山村・海村調査を追跡し、その変化の様相から地域社会と近代化の解明をめざした『地域社会と「近代化」——柳田国男主導「山村調査」「海村調査」の追跡調査から——』（二〇〇五）や『沖縄宮古島下地民俗誌～1974-1976 フィールドワークの記録～』（二〇一）などがあり、沖縄宮古島における継続的な民俗調査をもとに研究成果をあげている。

崔吉城（東亜大学）は、留学研究員となり、「韓国の祭りについて——特にシャーマニズムの土着化に関連して——」（『日本民俗学』九八、一九七五）、「朝鮮の祭りと巫俗」（第一書房、一九八〇）、「沖縄オナリ神信仰一考」（『日本民俗学』一六九、一九八七）、「韓国における日本民俗研究の回顧と展望」（『日本民俗学』一七五、一九八八）、「韓国社会における飲酒・飲茶の意味」（『日本民俗学』一九五、一九九三）などを発表し、韓国の民俗、とくにシャーマニズムの研究を中心に活躍している。

服部守史は、「柳田国男の『中農養成策』に関する考察」（『常民文化』三、一九八〇）、「境川流域のジミョウと組合——大和市大字上和田の事例から——」（『常民文化』四、一九八一）などを発表し、民俗調査研究などに従事した。

藤井せい子は、「沖繩・宮古島平良市における商業活動——市場を中心とした予備的考察——」（『城』二、一九七六）、「女性の商活動の社会的意味」（『日本民俗学』一九八（シンポジウム）「民俗文化における『女性像』」、一九九四）などがあり、とくに沖繩における女性の経済活動について調査研究していた。

細野由美は、「憑きものに関する一考察——飛驒のゴンボダネをめぐる——」（『常民文化』三、一九八〇）などに見られるように、憑き物研究に成果を残している。

松田精一郎（元鳥取県立図書館）は、「昔話『夢買長者』について——呪宝としての夢の価値の変遷と主人公の交代——」（『民俗』九五、一九七七）、「口承文芸」（『日本民俗学』一二四〈特集 日本民俗学の研究動向（昭和五二・五三年）〉、一九七九）など、口承文芸の分野を中心に成果をあげるとともに民俗の調査研究で活躍した。

三田村（中村）佳子（元埼玉県立歴史と民俗の博物館）は、「渡り職人『西行』の予備的考察——ある鋳物師の半生——」（『日本民俗学』一九五、一九九三）、「振髪的女——鍛冶神画像からみた女性の位置——」（『日本民俗学』二〇五、一九九六）、「生業を分類するということ」（『日本民俗学』二二七〈特集 日本民俗学の研究動向（一九九七・一九九九）〉、二〇〇一）などがあり、とくに『東京近郊農村の変貌——埼玉県朝霞市の生業——』（私家版、一九九三）では、東京への農産物供給地である地域において昭和三〇年代後半から畑地の宅地化が急速に進んだ都市近郊農村の変貌の過程について詳細な調査をもとに明らかにすると同時にひとつの民俗誌を作成している。さらに『川口鋳物の技術と伝承』（聖学院大学出版会、一九九八）では、近世から続いた伝統的な技術による鍋・釜・鉄瓶を生産した鋳物の町で映画「キューポラのある街」の舞台にもなった川口で、途絶える寸前の鋳物製作技術や周辺職人の生産活動、伝承する生活、信仰の世界などについて詳細な実地調査をおこない、川口鋳物師の全体像を明らかにしている。

また、『風流としてのオフネ——信濃の里を揺られゆく神々——』（信濃毎日新聞社、二〇〇九）を発表し、第四六回柳田賞を受賞している。本書は、海のない長野県内に「オフネ」と呼ばれる舟・船の形を模した出し物が各

地の祭祀に担がれ曳かれていた民俗芸能に注目し、丹念な調査研究をもとに、その由来・実態・分布・系譜・型式などを明らかにし、とくに諏訪平・松本平を中心にその系譜と変容について解明している。他にも、三田村は職人の技術伝承・生業から、近年は山車、神楽などの民俗芸能の分野で活躍し、着実に成果をあげ続けている。

茂木栄（國學院大學）は、「都市化社会における民俗学の役割——新聞の郷土キャンペーンと世田谷地区民俗調査を関わらせて——」（『日本民俗学』二二二、一九七九）、「祭り」と伝承からみたムラの宗教空間——長野県下伊那郡天童村向方の事例研究——」（『神道宗教』一一〇、一九八三）、「民俗芸能」（『日本民俗学』一六〇〈特集 日本民俗学の研究動向（昭和五八・五九年）〉、一九八五）、「祭り伝承の持続と変化——南信濃遠山の場合——」（『日本民俗学』一二五、一九七九）、「まつり伝承論」（大明堂、一九九三）などの成果がある。ヤマの祭として長野県信州遠山郷の霜月祭、新野の雪祭、マチの祭として東京府中の大國魂神社の「くらやみ祭」や尾張大國霊神社の「国府宮はだか祭」について持続と変化に照射した研究もある。祭祀研究・民俗芸能の分野で成果をあげるとともに、研究成果を映像表現するために祭りの映画製作を試みるなど、活躍している。

森正康（元松山東雲短期大学）は、「宇和地帯の隠居制と位牌祭祀」（『日本民俗学』一六六、一九八六）などがあり、四国地方を中心に民間信仰を調査研究し、成果をあげている。

矢口裕康（元宮崎女子短期大学）は、「日向の河童伝承——伝承存在と意識——」（『日本民俗学』一三三、一九八二）など、昔話研究、とりわけ昔話の語り場について研究成果を残した。

山本質素（日本大学）は、「地域と民俗」をテーマに掲げ、「日本民俗学における『地域』の概念」（『城』一、一九七四）において、民俗事象に存在する地方差と民俗を存立させる基盤である地域社会を考察するために、「地域」の研究史をまとめている。地域民俗学的方法の具体的な手続きと方法、狭い地域の地域性から出発してより広い範囲の地域性を順次に把握していく方向が、地域民俗学のめざすことであると提言した。「サワの協力と社会生活——岩手県江刺市梁川東沢目の地縁組織——」（『常民文化』四、一九八二）、「村制と族制」（『日本民俗学』一二

四〈特集 日本民俗学の研究動向（昭和五二・五三年）〉、一九七九、「地域民俗学」を標榜し「日本民俗学における『地域差』と『地域性』概念について」（国立歴史民俗博物館研究報告）五二、一九九三、「位牌祭祀からみた『家』観念と祖先観——近代化の過程における変化——」（松崎憲三編『近代庶民生活の展開』三一書房、一九九八）などの成果をあげている。

また、岩崎、鈴木、松田、山本の四人は伝承文化研究会を結成し、刊行された各種の「民俗誌」を対象にして「民俗調査報告書」と比較分析を試み、民俗誌のあり方などを検討した研究成果を共著「〈民俗誌〉の系譜」（『日本民俗学』一一三、一九七七）としてまとめた。

3. 研究活動の軌跡Ⅱ——博士課程前期・博士課程後期（一九八三）

ついで、大学院の改編以降の卒業生について五十音順に紹介する。ここに、登場するメンバーの多くは研究室などで一緒に勉学に励んだ経験がないが、研究活動を介して交流がある諸君である。

秋山（吉越）笑子（千葉県立中央博物館）は、「笑祭に関する一考察——山口県防府市小俣のお笑い講の事例——」（『常民文化』一一、一九八八）、「手賀沼における『農漁村——増田実日記』に見る漁撈を中心として——」（『歴史と民俗』三一、二〇一五）などを発表している。近年は、都市農村低湿地における生業について調査研究している。

岩崎竹彦（熊本大学）は、「フォークロリズムからみた節分の巻ずし」（『日本民俗学』二二六〈特集 フォークロリズム〉、二〇〇三）、『新時代の博物館学』（芙蓉書房出版、二〇一二）、編著書『福祉のための民俗学——回想法のスズメ——』（慶友社、二〇〇八）などがあり、民俗学と博物館の接点から実績をあげている。

宇田哲雄（川口市教育委員会）は、「家格と家例——埼玉県浦和市大字北原の家例——」（『日本民俗学』一七六、一九八八）、「家例としての禁忌習俗の発生」（『日本民俗学』一九一、一九九二）、「川口鋳物業研究の視点——産業の近代化と民俗学——」（『日本民俗学』二二九、一九九九）、「民俗学における産業研究の沿革と重要性について・産業民俗論序説」（『日本民俗学』二七八、二〇一四）などを発表している。最近では、産業民俗学の分野で成果を出している。

及川祥平（川村学園女子大学）は、「武田信玄祭祀史考——近世・近代を中心に——」（『日本民俗学』二六八、二〇一一）、「四十七士の祭祀顕彰とその教育資源化——赤穂市の状況を中心として——」（松崎憲三編『人神信仰の歴史民俗学的研究』岩田書院、二〇一四）、「祭祀的なる場における歴史表象と偉人表象——山梨県下の祭礼・イベントにおける状況を中心に——」（『信濃』六七—一、二〇一五）および『偉人崇拜の民俗学』（勉誠出版、二〇一七）などを発表している。主に、人の神格化の過程や歴史の表象に照射した研究を試み、成果をあげている。すなわち、歴史上の人物である武田信玄、徳川家康、楠正成らが共同体の記憶の中で、地元の英雄として、あるいは神として立ち現れる場面を注視し、そこから地元の人びとが彼らに何かを託しながら、伝説化していく過程の解明を試みる。同時に、彼らを祀る神社、史蹟、祭礼なども丹念に検証している。今後は、新しい分野での活躍に期待したい。

大崎茅（朝霞市博物館）は、「個人の日常的つきあい関係について——埼玉県比企郡小川町下里島根在住の一話者による記録の分析を通して——」（『常民文化』一一、一九八八）などの成果がある。博物館において調査研究を続けている。

大月隆寛（札幌国際大学）は、「常民・民俗・伝承——開かれた民俗学へ向けての理論的考察②——」（『常民文化』九、一九八六）、「民俗学という不幸」（青弓社、一九九二）などがあり、民俗学に対して批判的な厳しい辛口の評価をしつつ、同時に民俗学界へ問題提起をおこなってきた。

大野一郎（厚木市郷土資料館）は、「今、両墓制とは何か——その存続・消滅をフィールドで考える——」（『常民文化』八、一九八五）などの成果がある。博物館では民俗をテーマにした展示や講座などで活躍するいっぽうで、民俗の調査研究を続けている。

小川徹太郎（一九五八～二〇〇三）は、現代民俗学の先駆者であったが、残念ながら志半ばで急逝したのは惜しまれる。研究成果は、『越境と抵抗——海のフィールドワーク再考——』（新評論、二〇〇六）にまとめられている。

亀井好恵（元武蔵野美術大学非常勤講師）は、女性の眼から著した『女子プロレス民俗誌——物語のはじまり——』（雄山閣出版、二〇〇〇）や女相撲を対象にした『女相撲民俗誌——越境する芸能——』（慶友社、二〇二二）などのユニークな成果がある。とくに、女相撲について、各地に伝承されている女相撲の諸相を涉猟し、しかも「隠れた」女の大力信仰を民俗学的視点からも明らかにしている。本来ならば、男性がおこなう相撲やプロレスを女性がおこなう点、すなわち越境する点に注目し、しかも丹念な民俗調査を基底にして、女性の眼を透して比較分析している。そのほかに、「雨乞女相撲についての一考察——信仰と娯楽のあわいに在るもの——」（『日本民俗学』二五一、二〇〇七）などがある。

小泉凡（島根県立大学短期大学部）は、「境界の神——日本人の病理観から——」（『日本民俗学』一五九、一九八五）などを発表している。とくに、『民俗学者・小泉八雲——日本時代の活動から——』（恒文社、一九九五）では、一九九〇（明治二十三）年に来日したラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が文学者とみられ、日本民俗学の発展に寄与していたにも関わらず、民俗学者としては評価されていなかったことに言及し、ハーンを曾祖父に持つ小泉が、民俗学的な業績などを日本民俗学の視点から文献資料なども駆使して捉え直した。その結果、ハーンを日本民俗学の分野に、同時に民俗学者としても位置付けた論考である。

越川次郎（中部大学准教授）は、「家伝葉の諸相とその変容——大雄山最乗寺の『大雄丸』を事例として——」（『民

俗学論叢』一四、一九九九）、『日朝さん』の信仰と目薬——ある民間療法の現在について——」（『常民文化』二三、二〇〇〇）、「病と通過儀礼」（谷口貢・板橋春夫編著『日本人の一生』八千代出版、二〇一四）などの成果があり、「薬と信仰——身延日蓮宗寺院の諸薬とその法的規制をめぐって——」（『日本民俗学』二二三、二〇〇〇）では、第二一回日本民俗学会研究奨励賞を受賞している。越川は、民間療法の分野、とりわけ「民間薬」の研究で卓越した成果をあげているといえよう。

今野大輔は、「『癩病』を取り巻く視線——ハンセン病の民俗学的研究の可能性——」（『常民文化』二九、二〇〇六）があり、「ハンセン病差別の民俗学的研究に向けて」（『日本民俗学』二五六、二〇〇八）では、第二九回日本民俗学会研究奨励賞を受賞している。また、こうした一連の研究成果をまとめた『ハンセン病と民俗学』（皓星社、二〇一四）は、医療民俗学（民間医療）の分野に新しい可能性を開拓するとともに、現在までタブー視されていたハンセン病の実態を明らかにした貴重な業績である。

金野啓史（日野市立新選組のふるさと歴史館）は、「唐桑のハママ信仰」（『常民文化』一三、一九九〇）、「子安信仰の一考察——福島県大沼郡金山町大志の事例から——」（『日本民俗学』二〇五、一九九六）、「小宮と祝神の御柱祭——諏訪地方南部（茅野市・富士見町）の事例から——」（松崎憲三編『諏訪系神社の御柱祭——式年祭の歴史民俗学的研究——』岩田書院、二〇〇七）などの研究成果がある。現在、博物館において調査研究を続け、活躍中である。蔡文高（元神奈川大学）は、「中国福建省西部客家の婚姻習俗」（『常民文化』一八、一九九五）などがあり、とくに「福建省西部地域の洗骨改葬——沖縄との若干の比較もかねて——」（『比較民俗研究』一三、一九九六）では、第一七回日本民俗学会研究奨励賞を受賞している。一連の研究成果をまとめた『洗骨改葬の比較民俗学的研究』（岩田書院、二〇〇四）もあるが、二〇一四年に急逝したことが惜しまれる。

佐藤智敬（府中市郷土の森博物館）は、「神社由緒と伝説解釈——茨城県の源頼義・義家伝説の記述の変化を通して——」（『常民文化』二二、一九九八）、「日先」神社と摩利支天の伝承」（『常民文化』二五、二〇〇二）、「五島

列島・椛島における点在集落の歴史——脱カクレキリシタン史の視点——」〔常民文化〕二六、二〇〇三〕、「五島列島・椛島のカクレキリシタン御帳箱——大小顛末福文書の分析を通して——」〔常民文化〕二七、二〇〇四〕などを発表しており、現在は博物館において調査研究を実施している。

猿渡土貴（江戸川大学非常勤講師）は、「山中明神安産祭りの素描」〔常民文化〕一九、一九九六〕、「近・現代における胞衣処理習俗の変化——胞衣取扱業者の動向をめぐって——」〔日本民俗学〕二二六、二〇〇二〕、「現代の産出とエナ観を捉える試みとして——東京都目黒区在住の女性たちを対象としたアンケートの結果より——」〔日本民俗学〕一三三二（特集 産出と生命）、二〇〇二〕、「エナ処理習俗の消失過程——『子産み』の今昔——」〔家庭生活の一〇〇年〕生活学二七冊、ドメス出版、二〇〇三〕、「婚姻と産出・子育ての民俗」（谷口貢・松崎憲三編著『民俗学講義』八千代出版、二〇〇六〕、「子どもの成長」（谷口貢・板橋春夫編『日本人の一生』八千代出版、二〇一四）などを発表している。とくに、エナに関する研究では、優れた研究成果をあげている。

渋谷研（大妻女子大学非常勤講師）は、「沖繩の冥界婚（グソーヌニビチ）からみる女性の地位——家、門中の帰属を中心に——」〔常民文化〕一六、一九九三〕、「沖繩におけるノロとユタ——憑依と相関関係の問題を中心に——」〔日本民俗学〕一八六、一九九二〕など、沖繩研究で成果をあげている。

高木大祐（我孫子市杉村楚人冠記念館）は、「漁業と供養——東北地方の鮭供養を事例として——」〔日本民俗学〕二四八、二〇〇六〕などを発表し、『動植物供養と現世利益の信仰論』（慶友社、二〇一四）では、動植物の供養に視点をあてた卓越した研究成果をあげており、今後の活躍に期待したい。

竹内由紀子（愛国学園短期大学）は、『食習調査』成果についての「一考察」〔常民文化〕一四、一九九二〕、「重層する食生活——新潟県北部一農村の「ゴツツォ」を事例に——」〔常民文化〕一六、一九九三〕などを発表し、食習の分野で活躍している。

新垣智子は、「沖繩の柴差行事——その変遷に関する一考察——」〔常民文化〕一五、一九九二〕、「沖繩におけ

る女性の集団帰属をめぐる」〔『常民文化』一六、一九九三〕など、祭祀や女性をテーマに沖縄に根ざした調査研究を行っている。

前田俊一郎（文化庁）は、「村落社会における墓の機能と意味——山梨県鳴沢村大田和の墓制と同族祭祀の相関から——」〔『日本民俗学』二〇四、一九九五〕、「両墓制の誕生とその後——明治期に成立した両墓制を考える——」〔『常民文化』一九、一九九六〕、「両墓制の再検討——近代に成立した両墓制をめぐる——」〔『日本民俗学』二二五、二〇〇二〕、「加賀藩祖前田利家の人神化と祭祀——藩祖信仰の民俗学的検討——」〔松崎憲三編『人神信仰の歴史民俗学的研究』岩田書院、二〇一四〕、「生」と『死』に向かう人生儀礼研究」〔『日本民俗学』二六二（特集）日本民俗学の研究動向（二〇〇六・二〇〇八）、二〇一〇〕など多数の成果をあげており、「近代の神葬祭化と葬墓制の変容——河口湖町河口の事例から——」〔松崎憲三編『近代庶民生活の展開』三一書房、一九九八〕では、第一九回日本民俗学会研究奨励賞を受賞している。さらに、一連の成果をまとめた『墓制の民俗学——死者儀礼の近代——』〔岩田書院、二〇一〇〕では、近代になってはじめて共同墓地、成立年代が異なる墓地が併存したまま、埋葬や造墓といった慣行がおこなわれてきている背景に、近代の墓地政策もたらした民俗変化がみられる点に注目し、このような墓地をめぐる同じ状況が全国的に見られたことを推察している。このことは、前田が鋭く指摘しているように日本民俗学界では民俗の変化・変容という視点から漠然と認識されてきたにもかかわらず、その実態については詳細に調査研究されてこなかった。そこで、各地の葬制・墓制が明治初年に定められた法制度に規制を受けてきたことに注目し、そうした先行研究を踏まえつつ丹念な民俗調査や文書資料によって、規範と習俗の関係、複雑な様相、死者儀礼の様相を解明している。そこには、前代を意識しながら「生活文化の変遷」を明らかにする研究の意義が認められる。今後の研究活動については、一層の活躍が期待される。

松崎かおり（青山学院大学兼任講師）は、「女性の積み立て頼母子講について——輪島市河井町・輪島崎町を事例として——」〔『常民文化』一六、一九九三〕、「ジシムルイの結合形態とその変容——神奈川県秦野市堀山下を事

例として——」(『日本民俗学』一八二、一九九〇)、「経済的講の再検討——『輪島塗り』漆器業者の頼母子講分析を通して——」(『日本民俗学』一九三、一九九三)、「社会——人々のつながりを問い直す視点——」(『日本民俗学』二二九(特集 日本民俗学の研究動向(二〇〇〇)~二〇〇二)、二〇〇四)、「夜、爪を切ってはならない」という禁忌——」(大島建彦編『民俗のかたちとところ』岩田書院、二〇〇二)などの研究成果をあげている。とくに経済的な講、ジシシルイ(地類・地親類)などを対象にして社会生活や経済生活の解明を試みている。これからも、〈女性の視点〉からの民俗研究に期待したい。

松田睦彦(国立歴史民俗博物館)は、「瀬戸内海島嶼部の出稼ぎ——研究史の整理と若干の提言——」(『民俗学研究所紀要』二七、二〇〇三)などがあり、「瀬戸内海島嶼部の生業におけるタビの位置」(国立歴史民俗博物館研究報告』二二六、二〇〇七)では第二八回日本民俗学会研究奨励賞を受賞している。『人の移動の民俗学』(慶友社、二〇一〇)は、ヒトの移動がもたらす農民生活への考察を試みたユニークな研究成果である。

丸谷仁美(秋田県立博物館)は、「女人講の組織とその変遷——千葉県香取郡大栄町一坪田の事例を中心に——」(『常民文化』二〇、一九九七)、「利根川下流域の女人講——観音巡行・巡拝習俗を中心に——」(『日本民俗学』二〇六、一九九六)などの成果がある。近年は、博物館を中心に調査研究を実施している。

美甘由紀子(八王子市郷土資料館)は、「大根をめぐる民俗——ハレの日での使われ方を中心に——」(『常民文化』二一、一九九八)などがあり、博物館を中心に調査研究をしている。

村尾美江(成城大学非常勤講師)には、「神前結婚式と『水嶋流』の影響」(『常民文化』二八、二〇〇五)、「婚姻儀礼にみる『礼法』の影響——夫婦盃の変遷の分析から——」(『日本民俗学』二三五、二〇〇三)、「水引の製造をめぐる——長野県飯田市の事例から——」(『民俗学研究所紀要』三二、二〇〇七)などの研究成果があり、従来民俗学では婚姻儀礼において等閑視されてきたテーマについて成果をあげている。

森田真也(筑紫女学園大学)には、「一九九〇年のイサイホー——久高島のイサイホー中止に関する報告——」(『常

民文化』一五、一九九二)、「沖縄久高島の巡拝儀礼と穀物起源説話——ウブヌシガナシヌウガンタテとウブクイ——」(『常民文化』一六、一九九三)、「観光と『伝統文化』の意識化——沖縄県竹富島の事例から——」(『日本民俗学』二〇九、一九九七)、「家を守護する女性たち——沖縄久高島の神役と家祭祀をめぐる——」(『日本民俗学』二二七、一九九九)、「フォークロリズムとツーリズム——民俗学における観光研究——」(『日本民俗学』二二六、一九九九)、「フォークロリズム」(二〇〇三)など、沖縄を中心に研究成果を出している。

八木橋伸浩(玉川大学)には、「近世後期の香具師集団——秩父商栄組合(埼玉県秩父市)所蔵文書から——」(『常民文化』一二、一九八九)、「現代社会と都市の民俗」(『日本民俗学』一二七〈特集 日本民俗学の研究動向(一九九七～一九九九)〉、二〇〇二)、「共同幻想の喪失と『個』への対応」(『日本民俗学』二五三、二〇〇八)など、都市民俗学の分野で研究成果を出している。

吉原睦(倉敷市教育委員会)は、「男女別複檀家制の基礎的研究——柏市周辺地域の事例から——」(『日本民俗学』二〇一、一九九五)、「二重の檀家慣行」に関する一考察——埼玉県宮代町の事例から——」(『日本民俗学』二二二、二〇〇〇)、「近世檀家制度の民俗学的考察——「一家一寺原則」の有無について——」(『民俗学論叢』一五、二〇〇〇)など、男女別複檀家をはじめとする檀家制度について研究成果をあげている。現在は、岡山県を中心に調査研究に取り組んでいる。

ここに紹介してきた多くの卒業生は、一九七三(昭和四八)年に開設され、柳田國男の遺志に基づき、沖縄研究の継続、「南島研究」の推進をめざした成城大学民俗学研究所の研究員、研究生としてプロジェクトの「民間信仰の調査研究」(一九七七～七九年)、「山村生活五〇年——その文化変化の研究」(一九八四～八六年)、「山村生活五〇年——その文化変化の研究の追跡調査」(一九八七～八八年)等に参加する機会をあたえられ、実績をあげる出発点となっている。

また、日本常民文化専攻課程から「日本民俗学会研究奨励賞」の受賞者を八名も輩出し、いっぼうで学位の取得者も順調に増えている。これからも、いっそう民俗学の調査研究に勤しみ、「成城民俗学」を発展させていくことを期待したい。

以上、なるべく多くの卒業生を中心に研究動向の紹介を試みたが、かならずしもその研究動向を十分に紹介する使命が果たせなかったことは残念である。さらに、合原香須美、荒一能、宇野正人（元江戸川大学）、沖田憲（武蔵野美術大学美術館・図書館）、黒川敏彦（藤沢市教育委員会）、小島清志、渋谷卓男（川崎市立日本民家園）、杉山博文（元岐阜女子大学）、瀬川渉（横須賀市自然・人文博物館）、高見寛孝（國學院大學日本文化研究所）、西海賢二、林（竹内）祥子、林洋平（成城大学民俗学研究所）、丸尾依子（山梨県立博物館）、三田村成孝、宮平実、三倉俊一、山口拡（福島県立博物館）、吉田純子（文化庁）、故重久武志、故吉田（館野）みどり等を取上げることができなかった。今後の機会に譲りたい。

おわりに

「成城民俗学」とは何か、ということを希求していたが、このことについては、松崎憲三氏がつぎのように的確にまとめられている。

「民俗学の分野に限って言えば、祭り・行事、民俗信仰、女性研究の分野、さらには沖縄研究を中心に実証的研究を積み重ね、多くの成果を残してきた。沖縄研究とはやや疎遠となったが、成城民俗学の中心は何といても、祭り・行事、民俗信仰の研究であり、この点を忘れてはならない。また、「山村手帖」、「沿海採集手帖」等をもとに、定点観測を重ね、その後の変化を辿るというスタンスは定着しており、これも成城民俗学の一つの特徴として発展的に継承されてしかるべきである」⁸⁾。

まさに正鶴を射ているといえよう。このことは、大藤時彦、鎌田久子、堀一郎、平山敏治郎、田中宣一、松崎憲三の先生方の間に、成城民俗学に対する共通の理念が脈々と受け継がれてきたことの証となっている。同時に、このような「成城民俗学」の系譜は、前述してきた卒業生の研究成果からも窺うことができる。

筆者は民俗学をどのように捉え、調査研究を実践してきたのか。明快に規定するならば、民俗学とは「民間伝承を通して生活変遷の跡を尋ね、民族文化を明らかにせんとする学問⁹⁾」ということになる。

さらに踏み込むならば、柳田國男の日本民俗学は小さな民俗の伝承の中に過去の生活の痕跡を見だし、人びとの生活変遷史を再構成する広義の歴史学としての民俗学を提唱した¹⁰⁾ことを踏まえて、日本民俗学を「伝承分析学」[traditionology]とし、「変遷論」と「伝承論」とを持つのが特徴であり、基本的な方法は比較研究方法であると¹¹⁾する新谷尚紀氏の考え方については基本的に同調できる。

また、民俗学には歴史的関心に基づく方法（歴史民俗学）と、現在の関心に基づくアプローチの方法（現代民俗学）との二つがあり、前者は歴史的世界を認識するために現在の民俗を調査・研究対象とし、後者は現在を理解する前提として、歴史的世界の把握を不可欠なものとしている¹²⁾という松崎憲三氏の研究方法にも基本的に同意できる。さらに、どちらの方法を選択するかは自由で、どちらを選択しても結果を出すことが大切であると指摘しており、民俗学の目的と方法に対して柔軟な姿勢で向い合っているといえる。こうした考え方は、基本的には柳田國男がめざした民俗学を継承しており、まさに「成城民俗学」の学風を言い表わしているといえよう。

こうした民俗学の目的と方法に対する理念には、基本的には賛同しているが、若干、踏み込んで考えるならば、たとえば研究対象となる資料には民俗資料（伝承資料）と歴史資料（文書資料）、研究方法には比較研究法と個別分析法、民俗調査法にはエクステンシブな調査とインテンシブな調査、さらに地域性（空間）と歴史性（時間）などがあるが、どちらか一つほうを選択するのではなく、研究テーマ（課題）に応じて適切なアプローチ法や研究方法を選択するべきであろうと考える。

また、今後の課題として現在までに蓄積された膨大な「民俗語彙」、「民俗調査報告書」（『民俗誌』）など、いわゆる民俗資料（ロウ・データ）を捨象するのか、あるいは活用するのか。活用するならば、どのように活用していくのか、などを具体的に検討していくべきであろう。これらの問題提起については、いずれ機会があれば言及したいと考えている。

最後に、「成城民俗学」の課題として、柳田國男⇨柳田民俗学の膨大な実績について批判的に捉えるだけではなく、真摯に対峙して、検証あるいは論証することが使命であると考えているので、今後に期待したい。

いつかは成城の卒業生が母校の教壇に立つて、この「成城民俗学」を次世代へと継続させていく使命を担い、発展させていくことを期待したい。

註

- (1) 堀川直義「創刊によせて——統合・分散・協力の弁証法——」『常民文化』創刊号、一九七七、i~iii頁。
- (2) その他に、「日本仏教史特殊講義」（教授 上原和）「美術より見た七世紀の日本・朝鮮・中国の文化関係」・「比較芸術史演習」（教授 高田修）「テキストの購読を中心に、北魏から宋に至る間の中国美術史とくに彫刻・絵画の展開をたどる」・「文化心理学特殊講義」（教授 築島謙三）「英国人の日本観について講ずる」・「コミュニケーション論演習」（教授 堀川直義）「本年度は、コミュニケーションと密接な関係にあるヒューマン・リレーションについて共同研究を行う」となっている。
- (3) 雑誌『常民文化』は、一九七七年に大学院生の研究活動の一環として、その成果等を発表する場として、常民文化編集委員会を立ち上げて刊行した雑誌。
- (4) ロナルド・モース著（岡田陽一・山野博史訳）、一九七七、『近代化への挑戦——柳田國男の遺産——』、日本放送出版協会、一九七頁。
- (5) この点に関しては、著書『近代化への挑戦——柳田國男の遺産——』でも触れており、その成果として野口武徳・

宮田登・福田アジオ編『現代日本民俗学Ⅰ・Ⅱ』（三一書房、一九七四・一九七五）をあげている。

(6) ロナルド・モース、前掲書、二二二頁。

(7) 「ムラ研究会」は、通称ムラ研といわれ、田中宣二先生を中心に、学部の卒業生や院生などが自主的に参加した研究会であり、会場は当時一号館の二階にあった文化史学研究室で夕方から始まった。メインテーマは、「ムラとは何か？」であったと思うが、熱気溢れるエネルギーに燃えていた。今となれば、ここには「成城民俗学」の基盤を模索する空気に満ちていたことがわかる。他大学の参加者もあり、毎回、研究会は盛大で賑やかであった。

(8) 松崎憲三、二〇一八、「成城民俗学の系譜——教員編——」、出版物未定

(9) 柳田國男監修・民俗学研究所編、一九五一、「民俗学辞典」、東京堂、五八二頁及び五七七頁。この項目は、井之口章次『民俗学辞典』の執筆者一覧（上）（『民間傳承』三三二、一九八一）によると、大藤時彦が執筆したという。

(10) 新谷尚紀、二〇〇九、『伊勢神宮と出雲大社——「日本」と「天皇」の誕生——』講談社、二二二～二一六頁。

これは、「補論 『神社とは何か？』の研究展示から見えてきたもの——博物館と大学院の可能性——」の一文である。

(11) 新谷尚紀、二〇一三、『伊勢神宮と三種の神器——古代日本の祭祀と天皇——』講談社、九～一一頁。

(12) 松崎憲三、二〇一五、「民俗学の現状への一言——研究姿勢、研究対象をめぐって——」『長野県民俗の会通信』二四九、二～三頁。今までに、こうした考え方を提唱する研究者はいたが、この点を踏まえてまとめた論考は見られなかった。

（神奈川県立日本常民文化研究所客員研究員）